



もっと **知** りたい!

# カハクのすべて

動物研究部

これぞ自慢の一品

植物研究部

研究者のフィールドワークに密着!

地学研究部

◎&◎形式 地学の難問に挑戦!

人類研究部

骨はすべてを知っている

理工学研究部

電子機器から望遠鏡、科学者の手紙やノートまで!

附属自然教育園

街なかに隠された江戸時代の“お宝”



「milsil(ミルシル)」について  
「milsil(ミルシル)の「mil(ミル)は「見てみる」「聞いてみる」「やってみる」の「ミル」。そのような「ミル」から、新たな、そして豊かな「sil(シル=知る)」が得られるでしょう。この雑誌とともに、皆様が楽しい「ミルシル」体験をされることを願っています。

## CONTENTS

3 サイエンス・インタビュー 科学のいま、そして未来  
**みんなに科学好きになってもらいたい!**  
～国立科学博物館の担う役割～  
林良博(国立科学博物館長/山階鳥類研究所長)

6 【特集】もっと知りたい! カハクのすべて

6 輝く! 道具たち

8 動物研究部  
これぞ自慢の一品

12 植物研究部  
研究者のフィールドワークに密着!

15 筑波実験植物園 —7000種の植物を育成保存

16 地学研究部  
Q&A形式 地学の難問に挑戦!

20 人類研究部  
骨はすべてを知っている  
—頭骨が語る人類の歴史

24 理工学研究部  
電子機器から望遠鏡、科学者の手紙やノートまで!  
—人間の作り出したものが研究対象

28 附属自然教育園  
街なかに隠された江戸時代の“お宝”

30 親子で遊ぼう! 科学冒険隊  
#50 科学の目で、どんぐりをかこう  
菊谷 詩子(サイエンスイラストレーター) 監修

34 milsilカフェ/編集後記/定期購読のお知らせ/次号予告



地球館1階の「地球史ナビゲーター」  
写真:岩橋仁子



表紙写真

今号の表紙は科博の研究者による、さまざまな研究調査風景です。

①自然教育園での毎木調査 ②伊豆諸島と小笠原諸島の間の無人の島々、豆南諸島における調査 ③ブータンで行ったセイタカダイオウの調査 ④電気技術史資料の調査 ⑤石垣島白保半根田原洞窟遺跡の発掘 ⑥アラスカ・トンシナ地域におけるジュラ紀島弧地殻断層の調査

## みんなに科学好きになってもらいたい!

### ～国立科学博物館の担う役割～



「科学技術史も研究対象として扱っていることで、展示の企画にも幅が出ます」と語る林館長。

「科博」の愛称で多くの人に親しまれるようになった国立科学博物館は、1877(明治10)年に誕生して以来、139年の歴史を積み重ねてきました。研究者が知恵を絞り工夫を凝らした常設展示や、切り口のユニークな企画展示で、これまで科学には縁遠かった人々をも、いっそう惹きつけるようになってきています。国内には博物館が5700以上ありますが、国立科学博物館とはどのような位置づけにあるのか、どのような使命をもって運営されているのか、展示の企画はどのようにして生まれるのか、林良博館長が解説します。

国立科学博物館長/山階鳥類研究所長

**林良博** はやしよしひろ

1975年東京大学大学院農学系研究科獣医学専攻博士課程修了。農学博士。獣医師。東京大学医科学研究所助手、同大学農学部教授、同大学大学院農学生命科学研究科教授、同大学総合研究博物館長、同農学部長、同副学長などを経て、2010年より山階鳥類研究所長。2013年より国立科学博物館長。1989年日本獣医学会賞受賞。動物に関する専門書、一般向け、子ども向けの著書多数。

### ■欧米の大博物館に負けない 展示の巧みさや美しさ

国立科学博物館(以下、科博)には  
どのくらいの人々が訪れているのですか。

科博は、2013(平成25)年度には、過去最大となる236万人の来館者をお迎えしました。2014年度はリニューアル工事があったので少し落ちましたが、昨年7月のリニューアルオープン以降、常設展だけでいうと、これまでの来館者数を相当に上回っている感触です。多くの方に来館していただくのは、本当にありがたいことです。

この好調は、これまでの努力が実った結果だと考えています。科博は、139年の歴史のなかで、2つの不幸な出来事に見舞われています。一つは湯島(東京都文京区)にあった1924(大正12)年(図1)、関東大震災による火災で全焼してしまっ

たこと。もう一つは第二次世界大戦です。1945(昭和20)年3月には東京大空襲のため閉館し、標本を近県に疎開せざるを得ませんでした。これらの困難を乗り越えて努力してきたことが、今日の来館者数につながったのだと思います。

2001(平成13)年には文部科学省から独立し、独立行政法人となって運営の自由度が高まりました。この制度変更もうまく作用したのではないかと思います。自由な発想は、国よりも民間の方が得意ですからね。これを機会に、職員も研究や展示にいっそう工夫をするようになり、その結果も来館者数に反映しているでしょう。

上野(東京都台東区)という立地は便利でよいのですが、欧米の自然史博物館に比べると面積が非常に狭いという不利な条件を抱えています。このハンディキャップを、狭い空間を上手に使う技で補ってきました。日本館、地球館を見

ていただくと、展示の巧みさに気づかれるでしょう。この点では、欧米の博物館に比べ圧倒的に優れていると思います。個々の展示も大変美しいと自負しています。昔の薄暗く、いかめしい雰囲気博物館もそれはそれで悪くありませんが、たくさんの人に来ていただくためには、明るさや爽やかさも必要なのです。



図1 東京都文京区湯島にあった当時の国立科学博物館

「東京博物館」という施設名で湯島聖堂構内に設置されていた。写真は1920年に撮影されたもの。写真:国立国会図書館デジタルコレクション「東京教育博物館一覽」大正9年」より